＊＊

26号 北海道がんセンターたより

平成18年5月発行

＊＊

独立行政法人国立病院機構　北海道がんセンター

〒003-0804　札幌市白石区菊水4条2丁目3-54　TEL 011-811-9111

ホームページ　http://www.sap-cc.org

編集発行人:山下 幸紀

北海道がんセンターの理念

私たちは、国民の健康で幸福な生活のため、最新の知識と医療技術をもとに、良質で信頼ある医療の提供に努め、特に「がん克服」に寄与することを目指します。　このため、

- 常に、医療の質と技術の向上を目指します。
- 研究、教育研修を推進し、医療・医学の発展に寄与します。
- 患者さんの権利を尊重し、誠実な医療を実践します。
- 自主自律、創意工夫の精神で病院運営に当たります。

太陽光線と皮膚

皮膚科医長　加藤　直子

今回は皮膚科から、以前にも紹介したことのある太陽光線の皮膚への影響について再度解説いたします。

20世紀末から世界的に皮膚がんが増加するようになり、その原因としての太陽光線が注目されるようになりました。色白の人が大量の日光暴露を受けると、中高年のがん発症年齢になってから皮膚がんが発生する確率が高まります。特に、幼児期に大量の日光にあたったり、レクリエーションの時などに一挙に大量の日光にあたったりすると皮膚がんの発生が高まることが疫学調査の結果でわかりました。太陽光線の中で皮膚がんの発生に関与しているのは紫外線（UV）です。このため世界保健機構（WHO）は昨年、サンベッドと呼ばれる紫外線を発生させる日焼け用器械を、18歳未満の人は使用すべきではないという勧告を出しました。

私達が生活している地表に到達している紫外線はUVBとUVAで、特にUVBは皮膚に紅斑（あかみ）を起こしたり、皮膚を老化させたり、発がんさせたりといった作用が強いものです。UVBの一部は、地表に到達する前に成層圏のオゾン層で吸収されます。最近は世界各地でオゾン層の減少が記録されていますが、そのために紫外線が増えれば皮膚がんも増えるのではと懸念されています。日本上空のオゾン量は、南へいくほど少なく、春より秋に減少します。札幌上空はもともと沖縄上空よりもオゾン量は多いのですが、最近10年間で2.6％の減少が観察されています。夏の正午には全紫外線の中に占めるUVBの比率が高まりますので、外出や日光浴を避け、する時にはサンスクリーン（日焼け止めクリーム）の外用をこころがけましょう。

太陽はもちろん悪いことばかりではありません。地球上の生物にとってなくてはならないものであるばかりでなく、明るさ、暖かさ、健康などの良いイメージを思い起こさせます。このため古来から信仰の対象にもなっています。また紫外線や赤外線は治療にも応用されています。皮膚科では紫外線療法を、過度の治療による皮膚の紅斑や発がんなどに注意しながら、乾癬、悪性リンパ腫、尋常性白斑などの患者さん達に施行しています。太陽とは上手に付きあうことが肝心です。

最後に皮膚科医４人を紹介いたします。年齢順に加藤直子、山根尚子、大澤倫子、柳輝希です。皆でよく勉強し、皮膚病の治療に努力いたしますのでよろしくお願い申し上げます。

Contents もくじ

太陽光線と皮膚……………………皮膚科医長　加藤　直子……1
栄養サポートチーム（NST）ってなんですか？……………………栄養管理室長　木幡　恵子……2
ふれあい看護フェスタ開催にあたり……………………外来 副看護師長　板垣　依子……3
新採用者研修を終えて……………………副看護師長　谷口　由恵……4

栄養サポートチーム(NST)ってなんですか？

栄養管理室長　木幡　恵子

栄養サポートチーム（以下「ＮＳＴ」という。）という言葉を聞いた事はありませんか？

今日は、このあまり聞き慣れないＮＳＴがどんなものなのかを簡単にお話します。

現在、医療施設においてチーム医療を提供することが必須条件となってきています。

ＮＳＴは栄養状態の悪い患者さまについて、院内各部門のそれぞれの専門職が集まり情報交換をしながら効率よく質の高い医療を提供し回復を早期にすることを目的にしています。

当院でも平成18年４月１日よりＮＳＴの活動が開始しました。

ではどの様な活動をするか簡単に説明します。

1、主治医より栄養状態の悪い患者さまの改善依頼がＮＳＴに提出されます。

2、医師をリーダーに各部門の担当者が意見を出し合いどの様に改善していくかを話し合います。

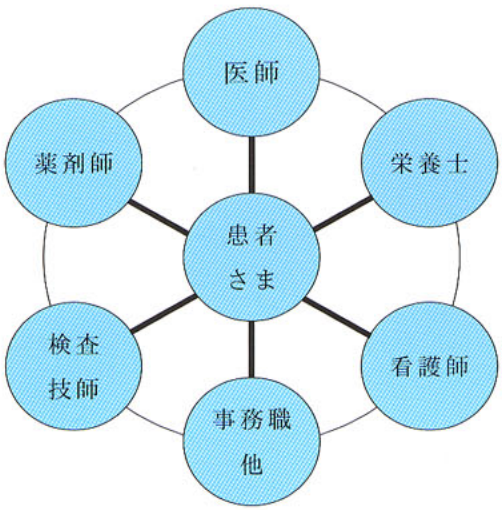
3、話し合いの結果を踏まえて患者さまの状態を把握し栄養評価をしたのちに回診となります。

4、経過観察をしながら更に改善方法を見つけ栄養状態良好につなげていきます。

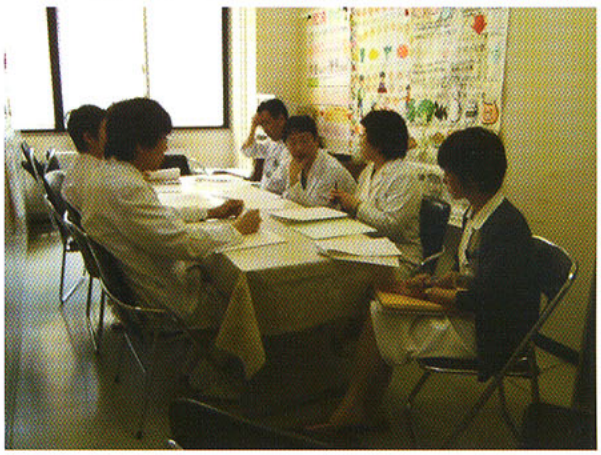
定例の検討会では依頼のあった患者さま一人一人について栄養状態が良好になるよう活動しています。

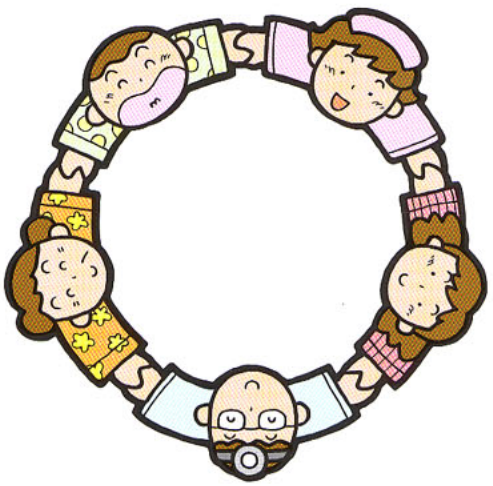
簡単に説明しましたが、栄養サポートチームの活動にご理解、ご協力をよろしくお願いいたします。

（チーム医療）



（多職種から構成される検討会メンバー）





ふれあい看護フェスタ開催にあたり

外来 副看護師長　板垣　依子

桜の開花が待ち遠しい季節になってきました。もう少しで北海道のあちらこちらで開花宣言が聞かれる事でしょう。

そんな心浮き立つ頃に「看護の日」があります。「クリミアの天使」と呼ばれ近代看護を築いたフローレンス・ナイチンゲールの誕生日にちなみ「看護の心、ケアの心、助け合いの心」を老若男女を問わず誰もが育むきっかけとなるよう1990年、旧厚生省により５月12日が「看護の日」と制定されました。また、国際的には1965年から国際看護師協会が「国際看護師の日」に定めています。

日本では「看護週間」が設けられ、今年は５月７日から５月13日まで全国各地でさまざまな催し物が開かれています。

当院では毎年恒例だった「ふれあい看護体験」に加え、平成16年からは地域の方にも参加してもらえるよう「ふれあい看護フェスタ」を開催しています。「ふれあい看護体験」では事前に申し込みのあった高校生らを中心に看護を体験してもらい、看護を身近に感じてもらえるような取り組みを行っています。また、「フェスタ」では外来ホールを開放し、看護師・薬剤師・検査技師・栄養士が「血圧測定」「骨密度測定」「体脂肪測定」「お薬相談」「栄養相談」を行ってきました。今年は５月12日（金）に「ふれあい看護フェスタ」を行います。例年同様の取り組みが出来るよう準備を進めているところです。自宅での介護や健康についての悩み、現在抱えている病気への不安など、ぜひこの機会にご相談ください。

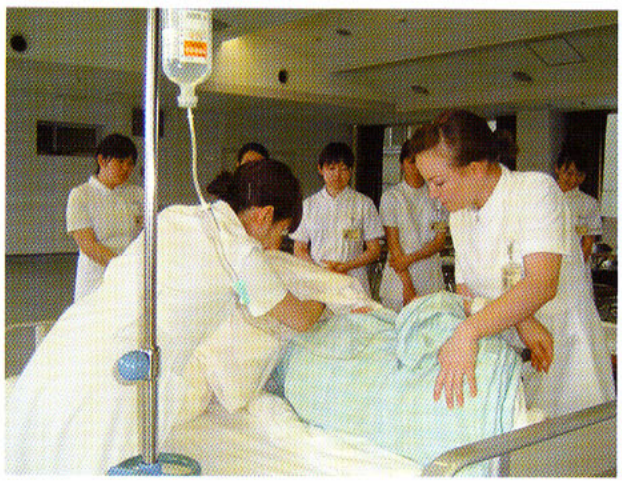
皆様のご参加を心からお待ちいたしております。

＊＊＊[ふれあい看護フェスタ]＊＊＊

平成18年５月12日（金）当院外来ホールにて　9：00～11：30

新採用者研修を終えて

副看護師長　谷口　由恵

今年度は４月３日から10日までの６日間の日程で、新採用者16名を対象に研修が実施されました。研修内容は病院の概況と運営方針に始まり、看護部の概況や看護師の心構え、具体的な看護技術（バイタルサイン測定・採血・注射など）の演習と多岐に及びました。

新採用者たちは、少しの緊張と大きな希望に満ちた面持ちで研修に挑んでいたように感じました。この研修を糧に「北海道がんセンターの一員」として、やさしく・確かな看護が実践できる看護師に成長されることを期待します。